

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	平成 2 1 年度第 2 回スポーツ振興審議会
開催日時	平成 2 2 年 2 月 1 6 日(火) 1 0 時 0 0 分～1 1 時 4 7 分
開催場所	高松市役所 1 3 階 大会議室
議 題	「高松市スポーツ振興基本計画（案）」について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	穴吹委員，小島委員，多田委員，野崎委員，林委員，松本委員，山下委員（欠席 3 名）
傍 聴 者	0 人 （定員 1 0 人）
担当課および 連絡先	スポーツ振興課 839-2626

会議経過および会議結果

次のとおり会議を開会し，議題について協議した。

- 1 開会
午前 1 0 時 0 0 分
- 2 会長あいさつ
- 3 会議の成立
事務局から，委員 1 0 名のうち出席 7 名にて，設置要綱により会議が成立していることを報告。
- 4 会議の公開について
野崎会長から，本日の会議では，非公開となるような事項の審議は想定されないことから，会議を公開することを諮り，異議なく了承された。
- 5 議題
 - ・「高松市スポーツ振興基本計画（案）」について
事務局より「高松市スポーツ振興基本計画（案）に対する意見」について説明。

○質疑

（委員）

地域密着型トップスポーツチームの定義を教えて欲しい。

（事務局）

高松市スポーツ振興基本計画（案）10 ページ下段にある，地域密着型トップスポーツチームについて説明。

（委員）

「トップスポーツ」というよりは，内容的には「プロスポーツ」というべきではないか。アマチュアスポーツとプロスポーツを一緒に論じてはだめである。地域密着型トップスポーツチームを行政が重視することは，アマチュアイズムを置き去りにしていると思う。

県の取り組みと市の取り組みの違いをはっきりさせ，市は，必ずしも県に追従する必要はない。スポーツを通じた市民の健康づくりを大前提として，市には取り組んで欲しい。

会議経過および会議結果

(事務局)

第5次高松市総合計画やまちづくり戦略計画では、地域密着型トップスポーツチームは、全国への情報発信や、市民のふるさと意識の高揚などを目的として支援している。具体的には、オーリーブガイナーズのシャトルバスや親子観戦する際の入場料の補助や、イベントへの派遣等を行っている。

これからも地域に密着する方法での活用を考えており、競技力の強化を目的としたものだけではなく、全国への情報発信とともに、地域のスポーツ活動に入り、地域住民の運動能力向上の手助けを目的としたものに取り組んでいきたい。

(委員)

市民スポーツ課からスポーツ振興課になったことで、地域の健康づくりを壊してはいけないという意見がある。お金のかからないプログラム開発を行い、かつてのおはようミニマラソンのような、市民にとって大きな1つの機運になるようなものを手がけていかないと尻すばみになると思う。様々な団体と連携することがあってもよいのでは。

青少年の競技スポーツは、インターハイや国体などで活躍することだけではなく、かつてスポーツは、若手を育てる大きな柱の1つであり、青少年がスポーツをすることで、今までも青少年健全育成の面で大きな力を発揮してきたと思う。そんな青少年のスポーツ振興に対して、この計画は、取り組み意識が薄いのではないか。青少年スポーツの色合いが薄い中で、突然トップスポーツチームが出てくることに違和感がある。

地域の健康づくりや市民スポーツが1つの柱というのもわかるが、できれば青少年スポーツの大切さを教育委員会や体育協会と連携し、スポーツ振興課としてもそこに視野を置くことがあってもいいのではないか。

いきなり地域密着型トップスポーツチームが出てくるため、全体からみて浮いている感じである。トップスポーツチームの目的が、若者たちに夢と希望を与えるといったような市民としての誇りとかの位置付けだとまだわかる。

トップスポーツチームへ市が支援をするのであれば、市民との交流がもっと深まるといったことがないと、財政的にも苦しいこれからの時代に、厳しいのではないか。

(委員)

地域密着型トップスポーツチームの「支援」という言葉だから、市民の税金がそこに行っているという印象を与えているのではないか。スポーツ少年団の立場から言うと、地域密着型トップスポーツチームはけっこう協力してくれているし、子ども達はトップスポーツのユニフォームに憧れを持つ。だから、市の支援は、決して無駄ではないと思う。ただし、やり方は考えていってもらいたい。

(委員)

これからは、たとえばマラソンのような、お金のかからないスポーツに取り組んでいくべきである。市民の健康づくりを推進し、高齢者の医療費を削減していくようなものにしていくことも必要と考えられる。

(委員)

地域密着型トップスポーツチームを支援することは、誤解を与えているのではないか。

市民スポーツなら市民の健康、部活動なら青少年の健全育成など、

会議経過および会議結果

はっきり目的がみえるが、地域密着型トップスポーツチームは、目的がはっきり見えないから、そこをはっきりさせるべきである。

市民が応援できる団体として育てていくことを考えると、「支えあおう」という項目のほうがふさわしいのではないか。指導者だけでなく地域と連携しながら市民が積極的に応援できる機運をつくらなければならないのではないか。

(事務局)

高松市スポーツ振興基本計画（仮称）素案検討ワークショップの提言では、「集まろう！みんなでスポーツ」のサブタイトルで「する・みる・みせる」という言葉があったため、「みせる」のところに地域密着型トップスポーツチームを入れた。「支えあおう！みんなのスポーツ」は、サブタイトルを見ると、指導者についての内容となっている。

(委員)

5 ページの「平成 27 年までに 40%」という基本目標は、国より目標が低い。どの年代のスポーツ実施率が低いかというと、国のデータ（平成 13 年）を見ると 30 代が最も高いのに、高松市では 30 代と 70 代以上が最も少ない。30 代はちょうど子育て世代だから、親子で参加できるイベント等を考えればいいのではないか。また、高齢者を運動させる施策を講ずれば、45% くらいを目指せると思うので、目標をもう少し高く設定してもいいのではないか。

また、体育指導委員の認知度が低く、目標設定も低いと思う。体育指導委員の制度は、どういうものなのか説明してほしい。市が毎年予算を使っているのに、25% の認知度では低いと思う。

(事務局)

高松市では、小学校区男女 1 名ずつの 108 名と学識体育指導委員 7 名の計 115 名を体育指導委員として市長から委嘱している。立場は、非常勤の公務員であり、一人一人に報酬も支払っている。職務としては、定例会への出席および学校開放運営委員会など地域の調整を担当するとともに、行政と地域の連絡役を果たしている。

また、ニュースポーツの指導もしている。

(委員)

小学校の保護者全員が体育指導委員を知っているくらいでないと、活動が不十分なのではないか。体育指導委員をもっと活用すべきではないか。

また、スポーツリーダーバンクをやめたらどうか。専門的なものは競技団体に任せ、体育指導委員をもっと活用していく施策を進めていくべきではないか。

国のデータを見ると、今後行いたいスポーツ種目では、ウォーキング、軽スポーツなどが多い。そこで、高松の遍路道を歩くイベントなどをもっと積極的にして、気軽にスポーツに参加できる人を増加するようにすればどうか。

(事務局)

体育指導委員は、地元の住民に「地区体育協会の人」という風に認識されていて、体指という肩書きが知られていないのではないか。体育指導委員は、今までは地域と行政のパイプ役であったが、これからは、今まで以上に地域での活動を積極的に推進していくようにする。

11 ページにある「魅力あるスポーツイベントづくり」では、単に道を歩くのではなく、歴史の名所に立ち寄るなど、よい特色を持つものもあるが、市民に PR しきれていない。これからは、そういったことも合わせて PR していく。

会議経過および会議結果

また、これからは従来のような市役所主導型のイベントではなく、市民提案型のイベントをしていきたいと考えている。

(委員)

体育指導委員の任期は何年で、平均年齢がどれくらいで、頻繁に入れ替わりがあるのか。そのような所に原因があるのではないか。活動をあまりしていない人にはやめてもらうようにしなければならない。

このままだと体育指導委員の活動は、事業仕分けの対象となり、予算も削減されるのではないか。

(委員)

30代や70代以上に絞った施策をすることが大切であろう。今までと同じようなことをするのではなく、PTAと連携するなど、どこかの団体と連携していくべきだ。現状では、活動母体となる団体が体力低下しているのではないか。地域でスポーツを広めたいと活動する人や、ニュースポーツの講習会を行ったりする人を、地域の中でもっと大切にしていかなければならない。地域が希薄になっている中で、毎年体育指導委員が次々に変わることは本当に良いことであろうか。体指の皆さんは、仕事との兼ね合いもある中、けっこう頑張っておられ、次のなり手がいない状況もある。

これからのスポーツ振興では、単にボランティアだけでなく、総合型スポーツクラブのように割り切ったお金のやりとりが必要ではないか。地域の中でスポーツを新しく始めようという人を広げていく活動をしっかりして欲しい。

(委員)

体育指導委員は、地区体育協会からの推薦なので、認知度が低いのは、地区体育協会に飲み込まれた形で活動していることが原因として考えられる。

(委員)

これからのスポーツはしんどい思いだけでなく、元気で明るく楽しい関係づくりが必要となってくるのではないか。

(委員)

地域スポーツを「コミュニティスポーツ」という言葉で広めていってほしい。範囲としては、おおむね小学校区とし、コミュニティ協議会とタイアップして、市が進めていくのがいいのでは。

(委員)

コミュニティスポーツが、市の大きな柱の1つだということは間違いない。平成27年度までにスポーツ実施率を上昇させるためには、各種団体がみんなでお金をかけずに良いものに取り組んでいくようにすべきである。市と地域の連帯を推進していくとともに、広域的に市を捉えていくようなことも必要である。

(委員)

地域密着型トップスポーツチームは、「集まろう！みんなでスポーツ」ではなく「支えあおう！みんなでスポーツ」ではないか。スポーツの定義からして、地域密着型トップスポーツチームが「みせる」の部分に入ってくることはいかなものか。

また、スポーツに対して苦手意識のある子どもや大人たちへ、意識の変化をもたらすような情報発信をしていくことも大切だと思う。また、コミュニティセンターでの各種会合（スポーツ以外）の際に、軽い体操などの簡単なものを入れてみたりすれば、きっかけづくりになるのでは。

県の「スポレク祭」と市の「トリムの祭典」は、ほぼ同時期に会場も同じサンポートで開催されており、内容もニュースポーツ体験など似通っている。いつも体験型というのもワンパターンなので、競技を

会議経過および会議結果

1つに絞ってやってみることも意義があるのではないか。

(委員)

地域密着型トップスポーツチームの目的を考えるのと同時に、本計画での位置を考えてみる必要があるのではないか。

スポーツが苦手な人へのきっかけづくりをするためのプログラムづくりを進める必要もある。また、今後は、県と重なるイベントの見直しなどしていくべきだ。

(委員)

高松市では、スポーツをやりたいと思っても健康に不安があるため躊躇しているような人の相談にのってくれる施設が1つもないと思う。そういった窓口があってもいいのではないか。

(会長)

論点を整理すると、ひとつ間違いのないことは、地域密着型トップスポーツチームの高松市のスポーツ振興における役割をより明確に示さなければならないことだろう。

これまでも、そしてこれからもスポーツの柱である市民スポーツや地域の健康づくりを、コミュニティ協議会や自治会などと連携する中で、新しく活性化していくことを考えなければならない。

また、スポーツを敬遠していた人達のためのプログラムづくりなども必要だ。

青少年健全育成の競技団体との関わり、その延長線上に地域密着型トップスポーツがくるのではないか。

また、各種団体との連携、教育・福祉・スポーツ医学など様々な分野の人達と連携することが重要だ。

(委員)

高齢者と子育て世代を対象としたプログラムを考えることが必要である。特に、高齢者を家に閉じこもらせないことを、地域の命題となるように仕向けるのが良いと思う。

(事務局)

コミュニティ協議会ができて、まだ1～2年くらいなので、コミュニティ協議会自体がどう動くか定まっていない状況である。地区体育協会もコミュニティ協議会に入っているので、コミュニティ協議会に対して地区体育協会や体育指導委員がどう関わっていくか。具体的にコミュニティ協議会の活動として進めることで、考えやすいのではないか。

(委員)

体育指導委員は、非常勤の公務員なので、しっかり認識を持ってもらうことが必要である。

(委員)

前回の意見を取りまとめた資料の中の、「自費で活動している指導者の助成を検討」という項目は、「スポーツ指導者の資質向上」ではなく、「スポーツ指導者の充実」に入ったほうがいいのではないか。